

2030年における人と社会について

社団法人日本消費生活アドバイザー・コンサルタント協会

理事 環境委員長 辰巳菊子

「2030年における人と社会について」を考えるにあたり、私は「2030年の社会に住む人々のくらし」という視点での記載をしたいと思います。

2003年、私も検討委員として一緒に作成しました神奈川県「新アジェンダ21 かながわ」から、その柱として大変な時間をかけてまとめあげた、2033年の神奈川の将来像（ビジョン）を記載したいと思います。

まさにこのビジョンでは、30年後の神奈川にくらす人々の様子や、社会のありかたを述べています。

今何をしなければならないかを考えるためのビジョンであり、県民の合意を得た将来像です。今何もしないと、おそらくこのビジョンとまったく正反対のくらしになるであろうことを暗に予測できると思います。

以下ビジョンから、

2033年、私たちの神奈川では・・・

丹沢のブナ林など、森林は元気を取り戻し、昔からのいろいろな動植物がバランスよく生態系を作っている

神奈川で作られた農水産物、林産製品の多くが神奈川で使われている

どんな製品やサービスにも環境や人にやさしいかがわかるラベル（環境ラベル）がつき、だれもがそれを見て環境や人のことを考えて買い物をしている

徒歩、自転車、鉄道、自動車などを上手に組み合わせる環境を考えた移動システムが定着している

身近な範囲でさまざまな交流・交換が行われ、いざというときに、互いに支えあい、助け合う仕組みがつくられている

在宅勤務や、自営、農業との兼業が増えたり、地域活動・社会活動に多くの時間を使ったりし、私たちのくらし方は多様化している

世界の地域と経験や情報の共有をし、ネットワークを活かした環境を改善する活動が活発になっている

子どもやおとな、高齢者、体の不自由な人、さまざまな国籍の人など地域のあらゆる人々が、互いに学びあいながら、環境のあり方について話し合い、進む道を決めていく参画のシステムが発展している

人々は鎮守の森や里山の手入れをし、身近なところでも野菜や草花を育てている

作った人の顔が見え、どの様に作ったかがわかる表示のある、安全で安心な農林水産物や食品を必要なだけ買うことができる

ものは大事に長く使い、使えなくなると、リサイクルしたりエネルギーにしたりして、ほとんどごみにならなくなっている

再生可能なエネルギーが増え、石油・石炭などの化石燃料は使用エネルギーの半分近くになっている

工場やオフィスの管理、ものづくりや配送などあらゆる事業活動において、環境に与える悪い影響を把握し、改善する努力が継続的に行われている

ゆっくりと 15 分も歩けば豊かな水や緑があり、だれもが遊び憩う

昔の姿に戻った干潟や湿地には貝やカニ、魚がいてたくさんの水鳥がやってくる

海や川の水はとてもきれいで、子どもたちは水と遊んでいる。夜には、星が降るように見える

有害な化学物質はみだりに生態系へ放出されないよう厳重に管理され、継続的に使用量を減らしている

このように 30 年後の神奈川では、人々は自然の循環に配慮したくらしを楽しみ、持続可能な社会に向けた歩みを続けている。

以上がビジョンからです。

この中には、 、 、 、 、 、 、 、 など、モバイル社会を想像出来るところも多々あります。モバイル社会を享受しつつも、人と人の肌のふれあいや心のつながり、また自然との五感に訴えるふれあいを喜ぶ人々のくらしを強くうかがえるビジョンとなっています。

新アジェンダがめざす到達点は持続可能な社会です。持続可能な社会を私たちは『現在と将来の

あらゆる人々が良好な環境のなかで生活を営み、基本的な要求を十分に満たすことができる社会』と考えています。

地球規模の視点に立って、将来世代を思い、それぞれの地域で着実な毎日の実践行動を積み重ねることで、持続可能な社会が構築されるという像が見えてきます。

一方では科学技術の発展をのぞみつつも、反面どうしても忘れてはならない皮膚感覚の暮らしを尊ぶ心を育てたいとの思いであり、まさに私の思う将来像と一致しています。

30年後の自分の暮らしはどうなっているのかと考えた時に、おそらくすばらしく発展するモバイル社会に、私はどこまでついていけるのか。

どこかで、どうしてもついていくことができない自分の姿が想像されます。

そう思えるからこそ、この多様な人々の協力でまとめ上げたビジョンを掲げました。

以上